

松茸が教えてくれたこと

末田家の長男として生まれた武雄は、おだやかで手のかからない子だった。

「お姉ちゃんの時とずいぶん違うねえ」と両親は笑った。特に助かったのは食べ物の好き嫌いがなく、野菜、肉、魚。何を出されても美味しそうに食べる姿は末田家の食卓を明るくした。

五歳の時、隣町に住む祖母がつくった松茸ごはんを口にした武雄は、松茸の香りに魅せられた。普段おとなしい武雄が「もっと食べたい、もうないのか」と騒ぎだし、大人たちを困らせたことは後々まで語り草となった。いただきものだからねえと申し訳なさそうにしながら祖母は「この子は将来、立派な食通になるよ」と太鼓判を押した。

武雄は小学生になると誕生日に親が買い与えた「きのこ図鑑」を貪るように読み、やがてさらなる知識を求めて学校の図書室や近所の図書館に足繁く通うようになった。

松茸はキシメジ科キシメジ属キシメジ亜属マツタケ節のキノコの一つで、アカマツのほか、ツガ、エゾマツ、トドマツ、シラビソなどマツ科の針葉樹に共生する。かつては日本全国いたるところで採れたが、松食い虫による被害や松茸山の荒廃によって採取量が極端に減り、現在では高価な食材を代表するひとつである。

末田家は裕福ではなかったが、幸い我が国には松茸風味のお吸いものなるインスタント商品があった。お湯を注ぐだけで松茸の香りと風味が広がるこの商品は武雄の味欲を充分満たし、飲み終わるたび小さな手を合わせて開発陣に感謝した。

中学一年生のとき、武雄は明治から昭和期に活躍した夢野久作という作家が書いた「きのこ会議」という短編小説に大きな感銘を受けた。初茸、松茸、椎茸、木くらげ、白茸、鷹茸、ぬめり茸、霜降り茸、獅子茸、鼠茸、皮剥ぎ茸、米松露、麦松露といったきのこたちが夜中に集まって談話会を始めるという荒唐無稽な話だ。そこでは松茸がこんな演説を繰り広げていた。

「皆さん、私共のつとめは、第一に傘をひろげて種子を撒き散らして子孫を殖やすこと、その次は人間に食べられることです。人間は何故だか私共がまだ傘を開かないうちを喜んで持つて行ってしまいます。そのくせ椎茸さんのような畠も作ってくれませぬ。こんな風だと今に私共は種子を撒く事が出来ず、子孫を根絶やしにされねばなりません。人間は

何故この理屈がわからないかと思うと、残念でたまりません」

松茸には等級があり、傘の内側が膜切れしていない「つぼみ松茸」と呼ばれる成長段階が見た目的に最も松茸らしいという理由で高級とされてきた。人間が胞子の飛散する前の状態のものを珍重するせいで、松茸の採取量は輪をかけて減っていく。武雄は大人になったら自分が口にする松茸はなるべく傘の開いたものを選びたいと誓った。

知見を深めるたび武雄の松茸への思いはますますつのつた。生鮮食品である松茸を美味しく食べるには、松茸山で採取してから調理するまでの時間が早ければ早いほどいい。ならば松茸産地に赴き、そこで食することだ。松茸は日当たりの良い南向きの斜面に生えやすい。日本の生産量一位は長野県で全国の六割以上を占める。なかでも上田市の塩田平はアカマツが自生して、良質の松茸がとれる名産地だそう。上田市といえば、戦国時代の真田三代発祥の地。当時家族そろって観ていたテレビドラマで馴染みある名前に武雄は深く興味を示した。

松茸はその年の気候の影響を強く受ける。豊作になるのは春から夏にかけて降水量が多い年、台風が多い年、残暑が厳しくない年。近年は異常な暑さのせいで収穫が少ないことも増えてきた。当然、不作の年は価格が高騰する。武雄は気象情報にも注意を払うようになった。

一方で近年は外国産の松茸も国産に遜色なく美味しいものがあり、国内で不作のときには重用されている。旅館や料亭では良質な松茸をなるべく安価に提供したい思いから企業努力を続けているが、残念ながらお客さんの多くは国産でない場合はがっかりされ、満足度が下がるという。

こうした国産至上主義に対しても武雄は疑問を抱いた。早く大人になって自分の稼いだお金で国産、海外産の松茸を食べ比べてみたい。そして頑張っている旅館や料亭の力になりたい。その思いは武雄の原動力となった。同年代と比べると明らかに異質な本棚を見て両親が心配した時期もあったが、武雄は優しさと深い探究心を持つ青年に育っていった。

時は流れ、武雄は大学を卒業して社会人になった。

彼の楽しみは毎年秋に上田市を訪れることだ。北陸新幹線で約一時間半の小旅行。上田では九月から十一月にかけて期間限定で松茸小屋が各地にオープンし、ふところ具合に合わせてコース料理から一品料理まで堪能することができる。鼻腔をくすぐる独特の香り、口の中いっぱい広がる食感。大げさでなく生きていることを実感する瞬間だ。

松茸は日本では弥生時代から食されており、奈良時代末期に編まれた「万葉集」でも歌の題材として詠まれている。この時代はただ単に「茸（たけ）」と呼ばれており、寛弘二年（西暦一〇〇五年）頃成立した『拾遺和歌集』に収められた「あしひきの山下水に濡れにけりその火まづたけ衣あぶらん」という歌が「松茸」という言葉の初出であるとされている。

香りを逃さないよう流水では洗わず、濡れ布巾でやさしくぬぐい、根元の石づきの固い部分を薄く削ぎ落とす。松茸を調理する際の基本である。

「昔はこの時期になると山でごろごろ採れたもんよ」と松茸小屋の主人が言った。

上田に足繁く通ううちに主人と顔なじみとなった武雄は、採れたての松茸の中から気に入ったものを選び、ふるまってもらった。松茸ご飯、お吸い物、土瓶蒸し。どれも頬が落ちる。なかでも主人お薦めの、アルミホイルで丸ごと包んだバター焼きは大のお気に入りだった。

「味付けは微量の醤油と塩だけ。贅沢な食べ方です」

「だろう？ 武雄さん、あんた今日もいい松茸を選んだねえ」

「傘の開いたものが好きなんです。皆さん好みはあるでしょうけど、僕はこっちのほうがプリプリして美味しく感じられて。それにしても、今年は豊作でよかったですね」

「うん、よかったよかった。観光客の皆さんに喜んでもらえて」

主人は心から嬉しそうな顔をした。

「残暑が厳しくて収穫が少なかった年は外国産の松茸も食べましたけど、それもすごく美味しかったです。上田の人が選んだものだから間違いない。やっぱり僕にとって松茸は上田で食べることに意義があるんです」

「そう言ってもらえると私らも嬉しいよ。頑張つて来たからねえ」

二人はおちよこに注がれた日本酒を同時にあおった。

「ところで武雄さんはレイラインって知つとるかね」

主人が見せてくれたパンフレットには「日本遺産 レイラインがつなぐ太陽と大地の聖地く龍と生きるまち信州上田・塩田平」と書かれていた。上田市の西南に広がる塩田平エリアには古くから仏教文化が花開き、鎌倉時代から室町時代にかけて造られた国宝や重要文化財、国宝などが数多く点在している。

「へえ、こんなにたくさんあるんですね」

「あんたは松茸しか目が行ってなかったものなあ」と主人は笑った。

レイラインとは夏至の朝、太陽が日の出の際に地上につくる光の線。生島足島神社から別所温泉までの軌道は不思議なことにレイラインと一致する。そして駅をつなぐ線路は空からみると龍のかたちをしていると言われている。主人はこの場所に受け継がれる伝承・風習をつむぐストーリーが二〇二〇年六月に文化庁より日本遺産に認定されたことを武雄に伝えた。

「塩田の人はみんな龍を崇め、祀り、ともに生きてきたんだよ」

「きつと龍は松茸をお腹一杯食べて天へ昇っていったんでしょね」

翌日、武雄はさっそく生島足島神社にお参りに行った。夏至の日は太陽が東の鳥居の真ん中から上がり、冬至の日は西の鳥居に沈む。そんな神秘的な場所に目を向けなかった自分を恥じながら、上田を訪れる楽しみがまたひとつ増えたことに心高ぶらせていた。

その年の暮れ、武雄に姉から電話がかかってきた。聞けば、甥っ子の丈人の様子が最近おかしい、学校に行きたくないと言っているという。何か悩みでもあるのだろうか。

「それがさっぱり話してくれないのよ。丈人、あなたになついていたでしょう？ 忙しいところ悪いんだけど、近いうちに話を聞いてあげてくれないかしら」

電話を切り、深く息を吸った。丈人は来年中学受験を控えた小学六年生だ。志望校に関することだろうか。それともいじめだろうか。小さい頃はよく遊んであげた丈人とここ数年会えていなかったことを悔いるように武雄は天を仰いだ。

しばらく考えた末、カレンダーに目をやると、すぐさま姉に電話した。

「もしもし、姉さん？ 今週末、丈人を預かってもいいかな？」

十二月二二日、土曜日。東京駅で丈人と合流して新幹線に乗った。冬休み前に突然、久々に会う叔父と二人で旅行することに丈人は戸惑っているようだった。黙ったままの甥に武雄は「いきなりごめんね。今日は叔父さんどうしても行きたいところがあった、丈人を誘いたかったんだよ」と優しく語りかけた。

丈人は星を見るのが好きな子だった。六歳の誕生日に子供用の天体望遠鏡をプレゼントした時は大喜びで箱を開け、手際よく組み立てると夜空を見るためベランダのある二階に駆け上がった。短く刈り揃えられた頭が、まるで松茸の傘のように見えた。

「叔父さんはまだ松茸のこと、好きなの？」

出発から三十分ほど経った頃、隣の席で大人しく座っていた丈人が話しかけてきた。武

雄の松茸好きは姉夫婦も丈人の前で噂にしているらしい。

「もちろん。叔父さんはあんなに美味しいものは他にないと思ってるんだ」

「ふうん」と言うと、丈人は車窓からの景色に目をやった。

猛スピードで流れていく景色を見ると不思議な気持ちになる。都市部を過ぎると一面に広がる田園。ミニチュアのようなトラクター。その脇を自転車で走るマフラー姿の学生たち。自分の知らない世界を感じさせてくれる時間を武雄は好んでいた。それは丈人も同じ気持ちだった。

上田駅に到着したのは正午前。いつもならまっすぐ松茸小屋に向かうところだが、今日は丈人と一緒だ。手近の店に入って、ランチを頼んだ。駅の周辺もすっかり冬の顔をしている。

「今日は丈人さんと歴史の勉強をしたいと思ってるね」

「歴史の勉強？」

「うん。叔父さんはここに何度も来ているけど、大切なことを見ていなかったんだ。だから今から見にいこうと思ってる。丈人くんも手伝ってくれるかい？」

「手伝うって？」

「いいから、いいから」

食事を終えると、武雄たちはまず信濃国分寺三重塔へ電車で行った。国分寺は「国やすらかに人たのしみ、災いをのぞき福いたる」という聖武天皇の勅願により奈良時代、日本の各国に創建された寺院。創建時の信濃国分寺は平将門の乱（天慶の乱）に巻き込まれて焼失し、現在の場所に建てられたと伝えられている。千三百年近い法灯を前に、丈人は目を輝かせた。

上田駅に戻り、別所線で次に向かったのは別所温泉。駅を出ると温泉場らしく硫黄の匂いが鼻腔をくすぐる。ここには鎌倉時代に開山した信州最古の禅寺、安楽寺がある。日本で唯一の八角形をした木造三重塔は長野県で一番早く国宝に指定されている。

「三重塔？ 四重じゃないの？」

「そう見えるよね。かつては四重塔とされていたけど、いまは一番下の屋根は裳階（ひさし）と解釈されているんだ。だから三重塔なんだよ」

「へえ、そうなんだ！」

丈人の顔がちよっと興奮気味に赤らんだ。どうやら興味を持ってくれたようだ。続けてこのあたりは数多くの寺社が建てられ、僧侶たちにとって特別な場所だったことから「別

所」と名付けられたんだよと言うと、さらに感心して深くうなずいた。

「三カ所目は今日の最後の目的地、生島足島神社だ」

別所温泉からタクシーで十分ほど走ると、池に囲まれた神社が現れた。時刻は午後四時をまわったところ。参拝を済ませて参道に向かうと既にカメラを手にした人がたくさんいた。

「何かあるの？」

「ここはね、一年のうちでこの冬至の日だけ見られる現象があるんだよ」

ほどなくして夕日が鳥居をくぐり参道の真ん中を通って落ちていく。

「うわあ、きれいだなあ」

天体観測が好きだった丈人が大きな声をあげた。

「実はね。今日参った三つの聖地は一本の直線上に位置するんだ」

「へええ！」。丈人は地図を見て驚いた。

日が完全に沈むまで、二人はその場を一步も動かないまま感動していた。

一泊二日の旅の前半が終わった。夕食は帰り道に見つけた『碧』という名前のレストランでとることにした。丈人は子供らしくオムライスとハンバーグで散々迷った結果、オムライスを選んだ。この店は自家製のトマトケチャップが人気らしく、ウェイターも「おすすめですよ」と言葉を添えた。

料理が運ばれて来るまでの間、武雄は丈人にストレートに話を振ってみた。

「近頃元気がないって聞いたけど、何かあった？」

丈人は素直にうんと答えた。

「この前、ふたご座流星群を見たんだ」

ふたご座流星群は毎年十二月五日頃出現し、十二月十四日前後に極大を迎える年間三大流星群のひとつだ。

「すごくきれいだった。星がスーツと現れたと思うと消えていって。ずっと見ていたかったけど、ママが風邪をひくからって窓を閉めちゃった。いつもそうなんだ。僕、大きくなったら星を研究する仕事をしたいの、そんな先のことより学校の勉強をしつかりしなさいとしか言わないんだ。そしたら何をすればいいかわからなくなって、僕、すごく不安になって……」

いまにも泣き出しそうな丈人の顔を見て、武雄も同じような時期があったことを思い出した。

「まあ、宇宙は広いからね。だったら、まずはひとつずつ取り組んでいくのはどうだい？ 例えば、僕たちに最も身近な星、太陽の光はなぜ暖かいのか、とか」

あっ、という顔をした。

「太陽の光に含まれる赤外線が物質に当たると、その物質を構成する分子が激しく振動して熱を発生する。電子レンジの理論と一緒だね。たぶん丈人くんが高校生になったら、この仕組みは授業でもっと詳しく習うから、いまのうちに理科の勉強をしっかりとっておこうね」

「叔父さんすごい！」

「それから、ふたご座流星群の“ふたご”座という名前は、ギリシア神話に出てくる大神ゼウスとスパルタの王妃レダの間に生まれた双子の兄弟カストルとポルックスからきているんだ」

「そうなんだ！」

興味津々な丈人は武雄の言葉にすっかり耳を傾けた。

「丈人くんがこれから中学、高校で学ぶことは、きっと将来の夢の実現に役立つと思う」

ここでオムライスが二人前、テーブルに並べられた。会話の途中だったが、武雄は湯気のとった出来立ての料理をまず先に食べるよう丈人にうながした。「いただきます」と手を合わせて、二人はスプーンいっぱいのおムライスをほおぼった。

「美味しい！」

「うん、びっくりした。これは美味しいね」

口元を真っ赤にして夢中でほおぼる丈人に、武雄はそつと声をかけた。

「応援するよ」

その言葉を聞いて、丈人はとても安心した顔をした。姉さんも義兄さんも頭が堅いから、こんな話もできなかったんだらう。堰を切ったように丈人は星にまつわる話を始めた。最初に興味を持ったのは月の満ち欠け。好きな星はベテルギウス。そして武雄がプレゼントした天体望遠鏡を今も大切に使っていること。

最後に、丈人は武雄にたずねた。

「どうして今日、僕を誘ってくれたの？」

「久しぶりに話がしたかったんだよ」

「僕の悩みを聞こうと思ってる？」

武雄は丈人の目をまっすぐ見つめた。そして何か気のきいたことを言おうと思い、メモとペンを取り出して「松茸」と書いた。

「この茸という字を見てごらん。くさかんむりに耳と書くだろう。これはね……」

むせるように丈人が笑った。

「叔父さん、本当に松茸が好きなんだね！」

「ああ、そうさ。叔父さんは松茸が好きだから、いろんなことに興味を持ってたんだ。ということで、明日は叔父さんの大好きな松茸三昧に付き合ってもらおうぞ」

「うーん、僕は明日もこのオムライスがいいなあ」と丈人はおどけて返した。どうやら太陽の恵みをたっぷり浴びた甘いトマトのケチャップの味がいたく気に入ったらしい。確かに『碧』のオムライスは美味しかった。

丈人に上田を好きになってもらいたい。そのために自分ももつと上田を知りたい。

ホテルに向かう道中、オリオン座が輝く夜空を見上げながら、来年の夏至の日に再びここに戻ってこようねと二人は指切りで約束した。